

院外茶話

vol.113 平成 26 年 10 月 1 日

日本の生活を捨てて
移住をした人々が
ガラパゴスのように
日本の伝統を受け継ぐ

五色の糸



臨終を迎える際には、旅立つ人の小指に五色の糸を結び、家族は寝床の周りに座って、この糸の端をもって見送りをする。

もともと念仏の信徒が臨終の際に阿弥陀様から自分の手へ、五色の糸を渡して極楽往生を願ったものだが、一般の人もこうして死者を見送るようになった。

人生の終焉を迎える儀式としては、心電図の電子音が止まるのを待つより、よほど相応しいと思うのだが、いつしかこの風習もなくなってしまった。

こんな風に人生を送る日本人の発想が原点にあったのだと思う。船が出航をするときに五色のテープを投げて、互いに最後までテープの端をもって、行く人を見送る習慣を作ったのは日本人である。

1915年にサンフランシスコで開催された万国博での出来事で、「テープで別れの握手を」というキャッチフレーズだった。

あのタイタニック号が沈没をしてから、たった3年のことなので、船旅と言えば危機感を覚えるのは当然のこと。ひと昔前の新幹線のホームでも転勤や新婚の人たちを見送る習慣があった。

作り笑顔で手を振りながら、早く電車が出てくれないかと思送ったものだが、この場合は必ず帰ってくるという確信があった。

その船出に際して私自身も「テープで別れの握手」をした経験がある。それは辛うじて記憶に残る程度だから、小学校に上がる頃で1950年代の半ばだと思う。

父の友人が海外に移住をすることになり、横浜港まで見送りに行った。デッキの上は二度と日本の土を踏まない人でいっぱいになり、無数のテープが投げられた。父は目指すテープの芯を探し当てて、私の手に握らせた。

汽笛が鳴ってよいよ船が動き始めると、テープの芯がくるくると回り、やがて手の中でブチッとちぎれた時の感触を今でも覚えている。帰りがけには中華街で食事をとった。

船の行く先はパラグアイと聞いたが、その国名も知らなかった。家に帰って小さな地球儀を回して見れば、南米大陸の西側に細長いチリがあって、アルゼンチンとブラジルに挟まれた内陸にその国はあった。

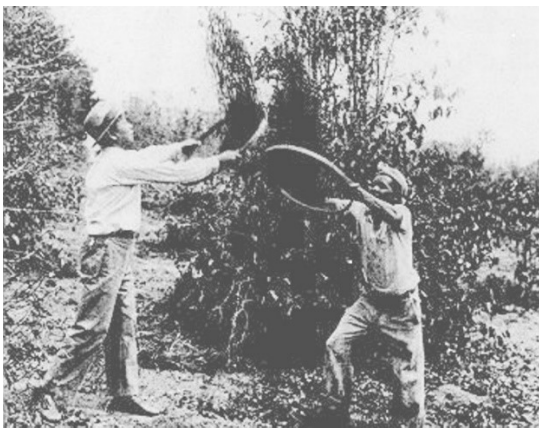


船の旅だから多分、南米大陸の南からアルゼンチンの川を数百キロも遡って、ようやくたどり着く国。日本を出て何か月を要したことだろう。その後、度々パラグアイの地図を眺める

ようになって、南米の土地にはいやに詳しくな
ってしまった。

明治から昭和の初期まで、日本人はあらゆる
国に出向いて行った。アメリカの西海岸、ハ
ワイ、ブラジル・・・しかし、当時は黄色人種
が世界に災いをもたらすという黄禍論が欧米
を席卷した時代。日系の移住者がどういう扱い
を受けたか容易に想像がつく。

アメリカでは排日移民法が定められて、や
がて日系人はアメリカの西海岸で、手塩に掛け
て育てた苳農園からの退去を命じられた。この
後、強制収容所の生活を余儀なくされたことは
ご承知のとおり。



ブラジルでも日本人の移民は極度に制限を
されて、隣国のパラグアイへ移住がはじまった
のは1937年のこと。何故パラグアイだったの
か。パラグアイは国民の大半が日本人と同じモ
ンゴロイド系で、人種差別が少ない。他にも土
地が肥沃で農業に向いていたこと、外国人でも
土地が購入できることなど、いくつかの要因が
あった。

そして、日本からパラグアイへ、本格的な
移住が始まったのは、それから20年も経った
1950年代で、私が父と見送った人は、丁度こ
の時期である。

しかし、どんな理由があるにせよ、生活の
全てをかけて見知らぬ異国の土地を目指せる
ものだろうか。実際に移住をした人の足跡を辿
れば、着いた瞬間から言葉は通じないし、住居
もない。飲み水もなくて、とりあえず手に入る
ものだけで、自給自足の暮らしを始めなければ
ならなかった。

ほとんどの人は農業に従事して、想像もし
なかつたバツタの来襲など、苦労話は山ほどあ
る。そんな中でもパラグアイが世界有数の大豆

生産国に発展したことは、日系人の功績による
ところが大きい。



一方で南米の土地に馴染めずに、挫折をし
た人の記録が表に出ることはない。

一方で、成功をした人は、誇らしげに自らの
広大な牧場や、高級レストランの案内役を務
めて、テレビの画面に登場する。二世、三世に
なればもう地元の名士になって、多くの市議会
議員や市長が誕生した。

日本ではペルーのフジモリ元大統領が有名
で、十数年前に訪日をした時には、ひと騒動が
あった。アメリカのダニエル・イノウエ上院議
員は大統領と副大統領に継ぐ地位にあったが、
残念ながら先日他界をされた。

しかし、この人たちとて渡航の理由を見れ
ば、決して好んで行ったわけではない。フジモ
リ大統領の母親は、極貧の生活の中で自ら口減
らしを意識して南米にわたった。ダニエル・イ
ノウエの祖父母は、一家による失火の借金を返
済するためとある。

私と父が見送った人には、どんな理由があ
ったのか。確かなことは他の移民と同様、現地
についたとたんに、その日暮らしの生活が始ま
ったこと。それでも暮らしが軌道に乗った人は、
ゆとりができると鳥居を立ててみたり、日本庭
園を造ってみたり。

日本に郷愁を持つ人々は、日本の風習を頑
なに守って、むしろ南米に昔の日本を見つける
ことがある。

私が横浜港で見送った人も年齢を考えれば、
すでに他界をしているものと思われる。もし、
家族がいたら五色の糸に繋がって、送られたこ
とだろうか。